

## 研究主題

### 「特別支援学校の生徒の対人関係の力を向上させるための指導法の開発と検証

#### ー「生活適応支援チェックリスト【知的障害特別支援学校版】」と

#### 「対人関係トレーニングサポート集（TTST）」による高等部の職業の学習を通してー

東京都教職員研修センター 研修部専門教育向上課

東京都立府中けやきの森学園 主任教諭 宮田 愛

## 第1 研究のねらい

特別支援学校在籍する発達障害のある生徒数は全国的に増加している。また、東京都においても愛の手帳が4度、または手帳を取得していない発達障害のある生徒の在籍数は増加傾向にある。知的障害特別支援学校高等部では、生徒数の増加及び障害種別の多様化に対応するため、高等部普通科における教育課程の類型化の推進を図っている。一方で、知的障害特別支援学校高等部に在籍する、発達障害のある生徒の指導内容に関する系統的な指標はなく、教師は個々の実態に応じ、試行錯誤しながら指導を行っている。

ところで、発達障害のある生徒には、相手の意図や感情の理解及び自己理解が困難であり、相手の気持ちを考えて話をすることが難しい、といった対人関係における課題がある。このような障害の状態による困難さの改善を図るために、知的障害特別支援学校における「自立活動」の指導は、時間を設定せず、各教科等を合わせた指導をはじめ、教育活動全般を通じて行うことが効果的であるとされている。自立活動の内容は六つに区分されており、その一つに「人間関係の形成」が位置付けられている。この「人間関係の形成」には、対人関係に関することと自己理解・他者理解に関する内容が特別支援学校学習指導要領解説自立活動編において示されており、発達障害のある多くの生徒の困難を改善、克服するための指導内容として考えられている。また、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成23年1月31日）では、障害のある生徒について、自立や社会参加に向けてソーシャルスキルトレーニングの導入等、適切な指導や支援の必要性が指摘されている。

以上の指導の実態や学習指導要領の内容を踏まえ、今日的な課題である発達障害のある生徒に対する合理的配慮及び個に応じた指導等の基礎的環境整備の充実のために、自己理解に基づく対人関係の力を知的障害特別支援学校高等部においても向上させる必要があると考えた。

そこで、本研究では生徒の対人関係における課題を教師が把握し、系統的に指導を行うための「生活適応支援チェックリスト【知的障害特別支援学校版】」（以下、「チェックリスト」と記す。）及び「対人関係トレーニングサポート集（TTST）」（以下、「TTST」と記す。）を開発する。「チェックリスト」は、生徒の対人関係における個々の課題を明らかにするために開発し、「TTST」は、教師に対して発達障害のある生徒の個々の課題に応じた指導内容と指導方法を理解し、実践するための指標の一つとして開発する。

## 第2 研究仮説

教師が「生活適応支援チェックリスト【知的障害特別支援学校版】」を用いて生徒の課題を明らかにして自己理解を促し、「対人関係トレーニングサポート集（TTST）」を参考に生徒の課題に応じて、職業の時間で見通しをもって指導することにより、特別支援学校高等部の発達障害のある生徒の対人関係の力を向上させることができるだろう。

### 第3 研究の内容と方法

#### 1 基礎研究

対人関係の指導に関する先行研究を分析した。東京都の特別支援学校小・中学部における自閉症学級では「社会性の学習」で児童・生徒の社会性の向上を図るための指導が位置付けられており、高等部では教科等の時間に自立活動の内容を取り入れて対人関係の指導を行っている。

国立特別支援教育総合研究所が全国の特別支援学校に対して実施した、知的障害の軽い生徒に必要な指導内容に関する調査では、対人コミュニケーション能力や社会生活におけるルールの理解などの指導の必要性が示されている。これらの具体的な指導内容や適切な指導方法について、検討を行うことが課題であることが分かった。

#### 2 調査研究

生徒の社会参加に関して、必要と思われる指導内容や指導が難しい内容を把握するために、特別支援学校の就業技術科・職能開発科・知的障害高等部普通科設置校全 29 校の教師を対象としてアンケート形式の調査を実施し、教師 226 名から回答を得た。その結果、「社会参加に特に必要と思われる指導内容」として最も回答が多かったのは、「対人コミュニケーション能力」であった（図 1）。

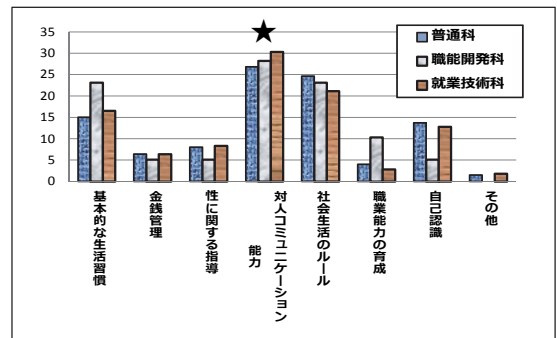


図 1 社会参加に特に必要と思われる指導内容

このことは、特別支援学校の生徒に対人関係の力の向上を図る指導の充実が必要であることを示唆していると考えます。また、「指導の必要性を感じているが指導が難しい内容」として回答が多かったのは、性に関する指導の次に、自分のことを正しく認識する、という「自己認識」であった。このことは、特別支援学校の生徒が自己理解を深めるための指導の工夫が必要であることを示唆していると考えます。

上記の調査に加え、3市4箇所就労支援機関の職員4名を対象として、企業就労等をした特別支援学校高等部の卒業生の課題について聞き取り調査を実施した。その結果、卒業生の就労先での課題として多く挙げられたのは対人関係に関することであった。また、身に付けさせたいスキルとして回答が多かったのは、ストレス・マネジメントや自己理解の力であった。このことから、高等部段階で対人関係の力や自己理解の力の向上を図る必要性が明らかとなった。

#### 3 開発研究

以上の基礎研究及び調査研究を踏まえ、生徒が自己理解を深め、対人関係における課題の改善・克服に取り組もうとする意欲がもてるようになる観点で「チェックリスト」を開発した。また、教師が生徒の対人関係の力の向上を図るために行う指導をサポートする観点で「T T S T」を開発した。

##### (1) 「チェックリスト」の開発

「チェックリスト」は、知的障害特別支援学校高等部普通科で生徒が活用し、教師が生徒個々の課題を明らかにできるように、都立青峰学園の就業技術科で活用されているチェックリストを基に作成した。その際、本研究で実施した、生徒の対人関係に関する調査研究の結果を踏まえるとともに、「教育課程編成基準・資料」（平成 22 年、東京都教育委員会）の内容を精査して項目を設定した。具体的には、自立活動の六区分の一つである「人間関係の形成」

における「自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う観点」に示されている四つの内容と、「自己理解」と「身だしなみ」を加えた六つの観点で、全 26 項目のチェック項目を設定した。

まず生徒がこのチェックリストを使って自己評価を行い、同時に同じ学級の生徒のうちペアを組んだ生徒に対して他者評価を行う。次に、生徒は自己評価及びペアの生徒からの他者評価を比較し、評価の異なる項目にチェックを付ける。チェックが複数あった場合、教師と相談し優先的に取り組む課題を決定する。このプロセスの中で生徒は教師との対話により、自己の課題を客観的に認識できると考えた。

## (2) 「T T S T」(対人関係トレーニングサポート集 for Teachers) の開発

「T T S T」は、生活適応支援チェックリストで明らかになった生徒の課題を克服するために、調査の実践事例を基にして、教師の指導の指標として開発する事例集である。教師はこの事例集を生徒個々の実態に応じて工夫し、活用することで、生徒の対人関係の力の意図的な向上を図ることができる。

## 4 検証授業

検証授業は、「チェックリスト」及び「T T S T」を活用し、都内の特別支援学校高等部第 2 学年の職業の授業で 3 時間実施した。対象生徒は職業類型の生徒 22 名である。

### (1) 「チェックリスト」の効果の検証

生徒は図 2 に示す流れで「チェックリスト」に取り組んだ。第 1 時と第 3 時の自己評価と他者評価との差の変容を分析した結果、15 名の生徒において差が小さくなった。このことから、全体の約 7 割の生徒は客観的に自己を見つめる意識が高まり、対人関係における自己理解が進んだと考えられる。また、この 22 名の集団を生徒の実態に応じた学習グループ別に分析したところ、図 3 のような結果となった。学力と作業力は高いが対人関係はやや低い傾向にある生徒の集団では、約 9 割の生徒が自己理解が進んだと考えられる。一方、作業への態度は高いが学力と作業力がやや低い傾向にある生徒の集団では、自己理解が進んだと考えられる生徒は約 1 割であった。

図 3 の各集団における☆の生徒は、第 3 時の自己評価において、より自分のことを深く考えることができたというコメントが得られた。

図 3 の各集団における★の生徒は、第 3 時の自己評価が大きく上昇している。他者評価との差が大きくなったことから、自己理解の力の向上のためには、教師が生徒に自己を客観的に振り返ることができるような声掛けを行う等の支援が必要であることが伺える。

図 3 の◎の生徒は、2 回目の自己評価が大きく下がり他者評価との差が大きくなったことから、自己肯定感が低いことが伺えた。この生徒達には、生徒の自己肯定感を高めるためにも、「T T S T」の「自分の長所を知ろう」という実践に取り組むことが有効と考えられる。

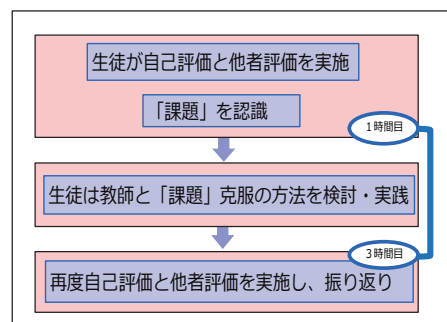


図 2 チェックリストの活用の流れ

		対人関係はやや低い傾向にある生徒の集団>	
		評価の差	
自己評価	上がった(62%)	8(50%)	2(12%)★
	下がった(38%)	6(38%)☆	0(0%)
		小さい(10%)	大きい(90%)
自己評価	上がった(10%)	0(0%)	1(10%)★
	下がった(90%)	1(10%)☆	4(80%)◎

図 3 学習グループ別の分析結果

## (2) 「TTST」の効果の検証

### ア 「TTST」は教師が見通しをもった指導を展開する上で有効だったか

対象生徒22名全員の共通の課題となった項目（「相手の気持ちを考えて話ができる」）について検証授業を実施した（図4）。その結果、教師は生徒一人一人の対人関係に関する課題と改善の視点を把握して意図的な授業を行うことができた。また、教師8名に「TTST」についてコメントを求めたところ、今年初めて職業の授業を担当した教師からは「職業の授業で取り上げたいと思っていたことが具体的に例示してあるので活用したい」「指導事例が段階的に示されているので使い易いと思う」等肯定的な回答が得られた。また、生徒の対人関係の指導に課題を感じている教師からは、「生徒個々の課題に対応した指導事例が載っているので、計画的に授業ができそうだ」といった回答が得られた。

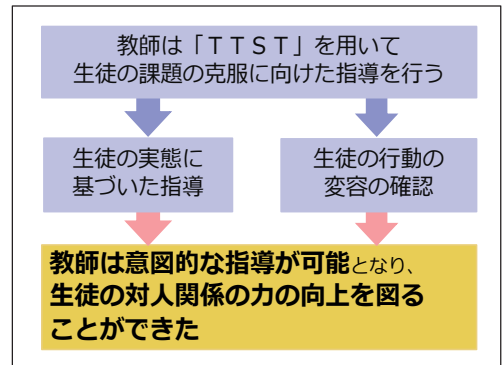


図4 「TTST」の効果の検証の流れ

「TTST」は教師が見通しをもった指導を展開する上で有効だったか

### イ 「TTST」は教師が生徒の対人関係の力を向上させる上で有効だったか

「チェックリスト」で明らかになった自己の課題について、生徒が課題の克服に向けた取組内容を自ら考えられるように指導を行った。3名の生徒を抽出した結果、2名の生徒においては部分的に指導の効果が見られ、1名の生徒においては顕著な効果が見られた。この1名の生徒は、教師が「TTST」を活用し、生徒同士で長所を見付け合う指導に重点を置いたことで、自己肯定感が低く自分の長所に気付けなかった状態から、自分の長所を認識して自己紹介ができるようになった。このように、教師は「TTST」を生徒の実態に合わせて、生徒の対人関係の力の向上を図るための指標として活用することができると考えられる。

## 第4 研究の成果

- ・ 検証授業における1回目と2回目の「チェックリスト」の結果を比較した結果、生徒は本チェックリストを用いた取組により自己の課題を客観的に把握し、改善を図る力が付いたと考えられる。また、現場実習を終えた生徒に3回目の「チェックリスト」に取組ませたところ、生徒全体の84%が、2回目の「チェックリスト」と比較して自己評価と他者評価の差が小さくなった。このことから、「チェックリスト」を用いた自己評価と他者評価を実施することで、自己理解の力が向上したと考えられる。
- ・ 検証授業における生徒の変容及び教師のコメントにより、「TTST」は教師が指導に見通しがもてるための一つの指標として活用できると考えられる。また、抽出生徒の行動の変容から、本事例集は生徒の対人関係の力を向上させるために有効であると考えられる。

## 第5 今後の課題

- ・ 成果物「チェックリスト」と「TTST」については、知的障害特別支援学校高等部職能開発科や小・中学校の特別支援教室、新たなタイプの都立高等学校での活用ができるように、各校種の教師に使ってもらい、活用状況の聞き取りを通してチェック項目の妥当性を確認し、項目を精査して改訂版を作成する。